
研究活動報告

The Eighth International Workshop on Biomathematics Modelling and Its Dynamical Analysis における web 招待講演

2022年8月26日残暑が厳しい中、Chinese Society of Mathematical Biology, CHINA Heilongjiang University 主催のワークショップ「The Eighth International Workshop on Biomathematics Modelling and Its Dynamical Analysis」(2022年8月26日~2022年8月28日)が開催され、筆者は日本人研究者グループの一人として招待講演を行った。この会は、8回目に当たり初回から日本人グループも参加している国際会議である。数理生物モデルと会議のタイトルにはあるが、この会議はその中でも応用数学寄りである。というのも中国では数理生物系の学科は数学科の下にあることが多く、応用数学や解析学を背景に持つ事が主流になっている。筆者はこの会議で「Stochasticity on life history and population dynamics」というタイトルで講演を行った。内容はコロナ禍における感染症研究で注目を集めている個体の異質性 (heterogeneity) の生活史、と人口動態に与える影響の数学的な理論である。筆者はコロナ以前よりこの理論の構築を長年研究してきた。反応は悪くなかったが、従来の感染症研究で用いられる常微分方程式とは違い、この理論は確率微分方程式を基本とするため彼らには馴染みが薄かったようである。中国における数理生物学の研究の中心は感染症の数理モデルの解析である。これもコロナ以前からの長い伝統を持つ。この会議での講演題目の殆どと言っても過言でないくらい感染症をテーマとしたものが多かった(当然、コロナによる世界中の関心の高さも影響している)。雰囲気はというと、この会議には長年の中国側の友人、知人もいるため、和気藹々とした雰囲気ではあった。しかし、日中間の政治的緊張の高まりから、「中国共産党」に「敵対的」である「日本」の研究者達には、所属先の情報だけでなく、パスポート番号や居所など詳細な個人情報提供を求められた。筆者としては、おざなりに対応し、先方も申し訳なきように「形式的なこと」と、深くは追求してこなかった。こうした経験から、しばらくは自由な研究集会の開催は制限されるだろうと筆者は感じた。

(大泉 嶺 記)

OECD 移民政策専門家会合 (SOPEMI)

10月10日から12日にかけてパリにある OECD 本部において移民政策専門家会合 (SOPEMI) が開催され、是川夕国際関係部長が専門家として参加した。本会合は年に一回、秋ごろ、OECD 加盟国の移民政策に関する専門家が一堂に会し、最新の国際移民の情勢について意見交換を行う場である。今回は3年ぶりの対面での開催となった。同会合では新型コロナ禍を経た後の新たな国際移動の情勢について、ロシアによるウクライナ侵攻の影響も踏まえた最新の動向について議論された。また、同会合は1972年に第1回が開催され、2022年でちょうど50周年となることから、最終日に記念会合が開催され、是川もスピーカーの1年としてアジアの国際移動の情勢について報告を行った。

(是川 夕 記)